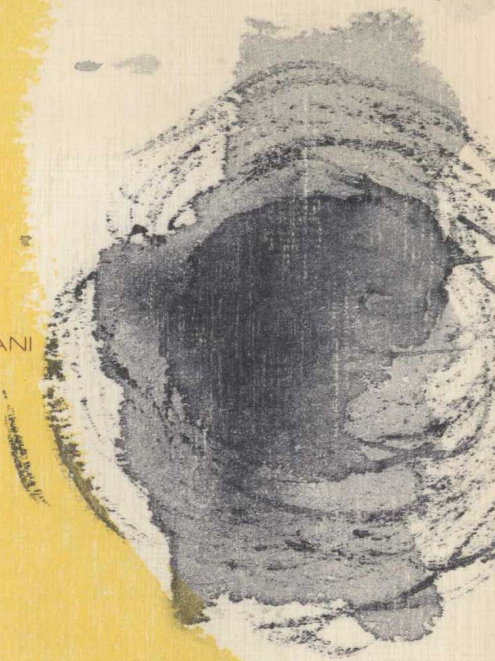


タンブルウィード

風転草

TUMBLEWEED FOUMIKO KOMETANI

米谷ふみ子



新潮社

タンブルウィード

風転草

TUMBLEWEED FOU MIKO KOMETANI

米谷ふみ子



著者略歴

一九三〇年大阪市生れ。大阪女子大國文科卒業。二科展に出品、関西女流美術賞受賞。一九六〇年、米國からフェローシップを受け、絵の勉強に渡米。ニューヨークでユダヤ系米國人の作家ジョシュ・グリーンフェルド氏と結婚、二人の息子がある。現在はカリフォルニアに住む。一九八五年「遠來の客」で第十回文学界新人賞受賞、「過越しの祭」で第十七回新潮新人賞受賞、八六年同作品で第九十四回芥川賞受賞。著書に「遠來の客」と「過越しの祭」を収録した『過越しの祭』（新潮社刊）がある。

タンブルウィード
風 転 草

一九八六年六月二〇日印刷
一九八六年六月二五日發行

著 者 米谷ふみ子

發行者 佐藤亮一

發行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢來町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—二六六—五一一一
（編集部） 03—二六六—五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 大日製本株式会社

定価 一〇〇〇円



©1986 Fumiko Kometani

Printed in Japan

ISBN4-10-359702-X C0093

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り）
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

風^{タン}
ブ
転^ル
ウ
草^イ
ド

日によって違う風が吹く。

東から吹く風は暑く、西から吹く風は涼しい。
東に山があり、西に海があった。

ばたっ

とドアの締まる音がした。

緩やかな勾配の芝生を、横向きに、両腕を拡げて、ケンはず馬がギャロップするように走り降りて行く。

「ケン、待^{ウエイト}って！」

道子は家から飛び出し、後を小走りに追った。

歩道に出ると、ケンは黒い前髪を海からの涼風になびかせ、眼を落ち着きなく動かして外股に歩き出した。思い出し笑いをしているように、「ふふふふ、ふふふ」と笑う。二人は歩道を右に崖の方に行き、九メートル、十メートルもあるパルムの下を通って車道に出た。パルムは潮風に煽られて、空中高く葉を叩き合い、霰がはじけているような音をさせている。真直ぐ、テマスキヤル・キヤニオンに面している崖の南端に行き、二人はそこから崖に沿って北に歩く。

このキヤニオンが海岸とぶつつかる所に、昔、アメリカン・インディアンが住んでいた。チュウ

マシユ・インデアンという。不器用な部族だったそうで、魚を漁るか、どんぐりを食べるかするぐらいで、大した細工ものは残さなかった。キャニオンを越えた向こうの崖の上に、インデアン達が食べたというどんぐりの木が残っている。百三十年ほど前、マルケズというスペイン人がやって来て、ランチ（大農場）を開いた。通りの名にマルケズというのがある。

一九一〇年頃、海岸沿いに日本人の漁師の村もあったというが、今はもう存在していない。

一九二二年、メソジストが土地を買い教会を建て、家を建てた。通りに牧師の名がつけられた。日本人のカガワという通里もある。

戦争中は、著名なヨーロッパの人々が逃げて来た。トーマス・マン、ブレヒト、オルダス・ハックスレー、シェーンベルク等、その他にハリウッドの俳優や、作家、音楽家を数え上げればきりがない。

この町をバシフィック・パリセードという。後にサンタ・モニカ連山を控え、前が太平洋、北にマリブウという町、南にはサンタ・モニカ市がある。

立ち枯れたアニス（茴香）が、青い海を背に茶褐色の影絵の如く風に揺れている。毎年雨期が過ぎると、このスパイスにする植物は、おみなえしの花を平たくしたような、黄色い花を咲かす。二メートルにもなる青味がかった薄緑の茎や、レースのように繊細なしなやかな葉は、薄荷と線香を混ぜ合わせたような甘い芳香を放つ。これはユーカリの木の匂いと共に、カリフォルニアの香であると思ふ。

左手は果てしのない太平洋。その海に迫った、切り立った崖の下をバシフィック・コースト・ハイウェイが南北に走る。北はサンフランシスコ、南はサンディエゴに通じるフリーウェイの出

来る以前からあつた道である。多種多様の車が西陽を反射して黄金虫のように^{きざら}気忙しく南北に走っている。軽快なスポーツ・カーのブーンという唸りが、また、重そうな荷を積んだ大型トラックの疲れたようなウーウーというエンジンの音が、吹き上げて来る潮風と共に崖を這い登つて来る。このハイウェイと太平洋の間には白っぽい砂浜が帯状に延びている。この眼下の海が日本まで続いていると思うだけで、道子はいつもほっとするのだ。

昨日の雨で洗われて、遙か南の水平線上にカタリナ島が濃紺にくつきりと浮かび、その左に、今日はいやに大きくパルロス・ベルデス半島が拡がっていた。弓なりの海岸線の右端はマリブウのポイント・ドウム。そして、カタリナ島とパルロス・ベルデスの半島で囲まれたこの太平洋の一部分が、今日は静かな湖のように見える。午後四時の太陽は眩しく海を照らし、折から、マリナ・デル・レイのヨット・ハーバーから出て来た多くのヨットが、その照り返しに入って行き、見えなくなってしまう。

いつ引きちぎつたのだろうか、まだ匂いの残っているアニスの枯れた葉を手を持ち、「うーうーいー」と、念仏を唱えるように、道子の後をケンは歩く。手を引かれるのが嫌いな彼は、白い半袖のシャツの衿の端を口にくわえ、茶色のズボンをゆらりゆらりと中国のタイクーンのように外股に歩む。

春から夏にかけて六カ月、待望の雨が昨日やっと降った。もう十月も終ろうとしているのだ。雨が降ると道子は毎年のことながらほっとする。

「もう山火事も起らんやろ。雨が降ったさかいにな。今年はトバンガ・キャニオンが焼けた」
トバンガ・キャニオンはこの町とマリブウの中間にある峽谷だ。毎年八月、九月、十月と乾燥

度が増し山から風が吹くと、南カリフォルニアではどこかで決って山火事がある。崖に沿ってアニスの下側に生えているチャパラルの灌木は乾燥に耐えるために油をたっぷりとその葉に貯えている。それに火が付けば、あつという間にこちら一帯は全滅するのだ。

六カ月の恐怖がこの一雨で去った。潤った大地の香がむんむんとする。乾いて、鱗が入っていた赤茶けた粘土質の土地が雨で柔かくなった。夏中溜った汚いスモッグも洗われた。道子は海に向つて、大きく息を吸い込んだ。海からの涼しい湿つた空気が六カ月振りに鼻腔から喉、胸と徐々に乾びた細胞を潤して行つた。何ともいえない清々しい気分になり、短く切った頭髪を手で掻き上げながら、後からついて来るケンを持ち返つて待つた。今年も生き延びたんだと息子の左手をぐいっと引っぱつた。白い雲を見るのは久し振りである。青空の青さを見るのも。

「ケン、ええ空気やから胸一杯吸うんやよ。今日は」

枯れた葉を細い指先に力をこめてくるくる廻し、相変らず「うーうー」言っているケンに話しかけ、再び彼女は胸一杯すうと空気を吸つた。小柄で華奢な道子と並んで歩いているケンの背丈は、もう彼女の肩に届かんばかりであった。八月に十歳になった。

「足下に気をつけて！ 沢山犬の糞があるから。ほらっ！ そこっ！」

と彼女は眉根を寄せて、口を尖らせ、息子の左手を右寄りに引く。

「これ、^{キャン・ユー・コール・ジス・ア・パーク}が公園や。犬のトイレと呼んだ方がましやわ」

と言いつつながら上向きの低い鼻をひくひくさせた。ケンに英語で喋っていても、大阪で生まれ育つた道子の頭の中は大阪弁なのである。

崖が少し削れた所に来ると、突然、ケンは母親の右肩の後から、すんなりとした長い指をかけて来た。指先についたアニスの香が、道子の鼻をついた。それから背後に廻り、母親の肉の付い

ていない肩胛骨の辺りに爪を立て、絡みつくようにして歩き出した。虚を突かれた道子は素早く辺りを見廻した。遙か向こうの枯草の間を見隠れして、ひょこひょことむく犬がこっちの方にやって来る。犬であるならば、百メートル先であろうと、五百メートル先であろうと素早くケンは見付けるのだ。暫くして、その犬は、道子の左にやって来た。ケンはより一層爪をたて、しがみついて来る。それから、足早に母親の右側に廻り、肩に載せた指の爪に力を入れたまま、もう一方の手で、後髪をやにわに引っぱった。道子はのけぞった。ケンは後髪を引っぱったままどの方向に行くのかと、立ち止って首を伸ばし、犬の方に眼を据えた。道子は前に進むに進めず立ち往生。むく犬は立ち止り、ケンを見上げて「ワン」と一吠えした。ケンは咄嗟に右に跳びのいた。小声で「ドント」と言った。久しく聞かなかった言葉である。吠えないでという意味か、噛まないでという意味かは審ら^{さづか}かでない。それから、彼は木にでもよじ登る如く背の低い母親に両手でしがみつき、手や脚により一層力を入れ、細い体に絡ませて来た。重いので息切れがする。どんな犬も、ケンを見ると、変な眼付きをし、胡散臭そうに鼻面を突きつける。道子の肩がひりひりし出した。

「こんなちっぽけな犬なんやの。恐がることないやないの」

と言いながらも彼女は後ずさりし、ケンを背後に庇^{かば}って、犬に「ゴー・アウェイ」と、大声で唳^{うなり}鳴り、睨^{にら}みつけた。

「放し飼にするぐらいやったら、犬なんか飼わんでもええのに」

空に向って彼女は独りごちた。

遙か彼方の青空に小さくジェット機が光っていた。

「ああそや！ 今日十月二十日」

過ぎ去った犬に用心しながら、殆んど後向きになって歩いているケンの右耳に、

「もう五日したら、^{おばあちゃん}グランマ日本から来るのよ」

と彼女は低い声で言った。

話しても返事をするような子供ではない。二歳半から言葉を失い始め、十歳の今は怖がった時以外は何の言葉も喋らない脳障害児なのだ。

老母が忙しい道子を手伝いに来るという。ニューヨーク郊外に住んでいた時二度やつて来たが、ロスアンジェルスはこの家には初めてであり、五年ぶりになる。家事が少しは楽になるだろうと、道子は首を長くして老母おととの到着の日を待っているのだ。

「もうあと五日」

毛布はクリーニングに出した。シーツも枕も用意した。おととの二つのダンボールに入った小包みが昨日船便で着いた。居間の隣のデン（家族団欒の間）を、老母の部屋に当てようと、仕切りの戸も付けた。ケンの毎日の散歩位はしてくれらるだろうと道子は楽しみにしている。

彼女の家族は、夫、アル四十七歳と、道子四十五歳の間にケンと十二歳の息子ジョンがいる。姓はタイテルバウムという。ケンは色白で、父親に似て手脚は長く、体の均斉も白人的であるが、顔は日本の市松人形のような整った顔をしている。ジョンの方は胴が長く、頭髮は黒く、真直ぐでこわい。アメリカ人から見れば、このために日本人に見える。だが顔立ちはどうちらかといえ、父親似である。

ケンに引つ搔かれた肩が痛むので、道子は散歩を短く切り上げ、雀がやかましく巢くっているパルムの樹々の下を通して家に向った。もう落日が水平線に出た靄の上を朱色に染め始めた。夕食の仕度をする間だけと、道子はケンを裏庭に連れて行つた。大きなユーカリの木が影を落して

いた。レモンや椿の木の前にブランコがあった。そのブランコに近づくと、ケンはやにわに、芝生の上に仰むけにひっくり返り、両方の踵で地を蹴った。靴も靴下も投げ飛ばしてしまった。

「きーっ」と甲走った声で叫び、手で芝生を塗り取り、口に入れ始めた。（何が気に入らんかったんやろ？ 背中が濡れる！　きのうの雨で芝生が濡れてんのに。一体どうしたんやろ、暑かったんやろか、犬に腹が立ったんやろか、もっと散歩しなかったんかしら。それとも、靴に小石が入ったんやろか。喉が渴いてたん？　爪を立てられたところがヒリヒリする。メンソレを塗らな）

こんな時側に行くと余計に大騒ぎになってむしゃぶりつかれることもあり、小さい彼女はそれに太刀うち出来ない。芝を呑み込みませんようにと念じつつ、「吐き出して」「吐き出して」と囁くように言って、家の中に入ることにした。放っておくとやがては治まるからである。

学校から帰って来て、居間でテレビを見ていたジョンが彼女を待ち構えていた。

「ママ、エリックがスケート・ボードを買ってもらったんだよ」

「ふうん」

道子は次に来る言葉を知っていたので、わざと素気なく振る舞った。心の中で次の言葉への応酬を用意していた。

「僕にも買ってよ」

（ほうら来た）

「危いからあきません」

「みーんな乗ってるんだよ」

「自動車に撥ねられるやないの」

「歩道で乗るから」

「引っくり返って、頭を歩道の角で打ったらそれまでやからね。脳障害はケン一人で沢山」

「大丈夫だよ」

「そういうことは前もって判りますかっ！」

「用心して乗るから。ねえ買ってよう」

ジョンは身をくねらせ執拗にねだる。

最近、四つ小型の車輪を付けた板に乗って、ガラガラ、ザザアーツと、猫も杓子も、子供から大人に至るまで、歩道や車道を右へ行ったり左へ行ったり、中には自分はスケート・ボードに乗ったままで、犬に引かせた大人も家の前を通る。だから、自分の子供だけ禁止するのはむずかしい。

突然、夫のアルが誰かと電話で冗談を言い合って、カラカラと笑う声がベッドルームから聞こえて来た。

「ダディと話さない。ママは絶対に反対なんやから」

と彼女はベッドルームのドアを指差した。

「買ってよう。ねえ。皆持つてるんだよ。ママもう車で僕を友達んとこに送ってくれなくてもよくなるんだよ。あれに乗ってけば歩く速度の倍の速さで行けるからね」

「阿呆な、余計に心配するやないの」

電話を終えたアルがベッドルームから出て来た。ズボンのベルトはバックルをせずだらしなく前に垂れている。

「ミチ、まだ夕食の仕度出来てないの？」

彼は上ずったきー声で言った。

「今日、ジムがシナリオ書いた映画を見に行こうかと思ってるんだ」

自分ではフランク・シナトラに似ているといっているが、実際は、顎の張ったベングリオンに眼鏡を掛けさせるとそっくりになる。その顔を、道子は上から下までゆっくりと見詰めた。（鈍くさいなあ！　ほんまに。わたしが困ってんの判れへんのかいな！）

「夕食？　散歩から帰って来たばかりやないのお。誰かが犬を放し飼いにしてたばかりに、ケンに髪を引っぱられ、肩に爪を立てられたんよう」

「……」

「ほら血が出てるでしょ」

後の衿ぐりをずらして夫に見せる。彼の視線はテレビのニュースに注がれ、人差指でこめかみを掻いている。

「ケンは庭で癩癩を起すし、ジョンはジョンでスケート・ボードを^か買うてって、どててたところもないの。そやからダディと話しなさいていうてたんやないの」

道子は鼻を鳴らして、不平がましく言った。

「一体いくらするものなんだ？」

テレビを見ながら不服そうにむくれているジョンに、上ずった声でアルは尋ねた。

「三十ドルだよ。ダディ」

黒い大きな瞳は懇願を湛えてアルを見つめた。

「高いもんだなあ」

「エリックが持つてるんだ。便利だつて言つてたよ。速くどこにでも行けるから」

「自動車に撥ねられるよ」

「歩道でだけ乗るから大丈夫だよ。ダ・デイ」

「どこに売ってるんだい？」

「ホビイ・シヨップ」

「じゃ、今度の土曜日買ってあげよう」

「本当？ うわあ！ すごいっ！ ダ・デイ有難う」

ジョンは片脇をきゅっと右頬に作り、跳び上った。長椅子に脱ぎ捨てていた自分のティ・シャツを右手で攔み、足音高く自分の部屋に走って行った。アルと道子の立っている居間は薄暗くなりかけて来たが、まだ明りも付いていなかった。庭にいるケンはずかしくなった。暖炉の横の書棚に置いてある白黒テレビは五時半のニュースをやっている。ケンの生まれる前に道子が描いた絵が壁に白く浮かんで見え、檜で出来た低いコーヒー・テーブルの上には雑誌が乱雑に二、三冊置いてあった。居間の二方の壁がマホガニーのパネルになっているので、余計に暗く見える。道子はアルの言葉に苛立った。ジョンをいつも物で釣ったり、甘やかしたりする。

「自動車だけやのうて、ひっくり返ったら歩道の縁で頭を打つと危いから反対してんのに」

道子の言葉に何の反応も示さず、逡巡の色もなく、アルは甲高い声で彼女を急かす。

「早く食事の用意！ 映画に行くんだから」

道子は、肩のうずいている傷にメンソレータムをつけにバスルームに行こうとしていたところなので、余計に気が立って来た。

「一人人を何とおもてんの？ わたしはここに子守と女中をしに来たんちゃいまっせ！ ちよつと大人しうしてたらつけ上つてしもてからに！ ケンの散歩から、台所から、掃除、ジョンの愚痴を聞き、その上、この子の算数も見んならん。おまけに、英語で書いたあなたの脚本まで読ま

されんねんから。ほんまに！ 何処の世界にこんだけする人いるのん？ まだその上にケン、普通の出来合い穿かれへんから、ズボンも縫わんならんし、皆のズボンの裾上げたり、ボタンの取れたん付けたり。映画に行く暇あんのんやったら、子供の算数位みてくれてもええやないの」

「ああ明日みてやるよ。ちよつと今からショーンに電話しなくては」

アルは無造作に、ベッドルームに引き返しかけた。その丸い背に向つて、道子は声を高めた。
「なんでも明日するいうて、算数なんか明日するではついて行かれへんようになんのんよ。毎日ささんと。作家というもんは、口叩きの手たらずや」

「うるさいっ！ すぐに人に噛みつく！ 人のすることにつべこべ口出しするなっ！」

アルは、眼をむき声を荒げて嘔鳴った。腹が減ると別人のようになる。道子の方は、腹が減つてようが減つてまいが大声で嘔鳴られると、それに負けない位の大声になる。

「ジョンの算数だけと違って、あなたの国の母国語の英語の書き取りまでわたしがすんねんから。RとLの発音でけへんから何読んでんのんか判らんとジョンに文句言われてもね。おまけに、日本に住んでた時は、わたしが一切合財、法律的な手続きをやったわね。アメリカは英語やから今度はあなたがする番やよというても、ニューヨークからカリフォルニアに移った時も、わたしが運送屋にかけ合はされて、結局あの運送屋、引越しの日に現われへんかったでしよ。それもわたしのせいやいうたやないの。わたしは、もうこれ以上しんどうて何もでけへんねんから。そんなわめくのは、わたしのやつてることが有難いことないねんやろから、このまま日本に帰りますさかい。わたしがいてへんと、どうなんのんか、ほんまに見てみんなことにはあなたは判れへんねんから。友達に電話ばっかりして、一時間も二時間も、用も無いのに冗談ばかりいうて、そんな時間あんねんやったら、手伝うてくてもええやないの。わたしは万能やないねんよ」

道子の眼が三角になり眉間が狭まって来る。白い面長な顔が怒りで上気した。

「さつさとどつか若い大きいええ人探して来たらどう？ あんなケン連れてたら、まあ誰も来んやろけど。それでも惚れて住みに来ますというたらええ人に決ってるわ。わたしは、何処にでも行きまっさかい。喜んで。その方が楽でええもん。自分のことだけしてたらええねんもん。あなたとあなたの子孫の世話するのんもう金輪際いやになった。ああいややいやや。ええ、もうわたしも四十五になったんやからね。今まで十二年間子供の子世話ばかりで何もしてけえへんかったんやから。老後の身の振り方も考えたいし……」

アルは口を開けて妻の顔を眺めていた。

「あの棚の上のスーツケース下ろしてっ！」

とベッドルームのドアの所に斜めに体を入れて、その部屋の押入れを道子は指差した。

「スーツケースをどうするんだい？」

「勿論着るもん詰めんねんやないの。日本に帰んねやないの」

道子の頬に大粒の涙がこぼれた。あの遠大な夢はどこかへ……彼女は自分を、早速悲劇のヒロインにしてしまった。偉大な絵描き、ピカソやマチスにも負けない絵描きになるのを夢みてアメリカにやって来た。その成れの果ては、この脳障害児の世話に明け暮れ、髪を引っぱられ、爪をたてられ、その上、夫から嘔鳴られて遺溺無く、こういう一生をこの夢の大陸で過ごさねばならない自分が哀れになって泣いているのを考えると、余計に涙が出るのであった。

アルは俯いて、すんなりとした人差指でこめかみを痒くもないのに掻いた。

ジョンが道子の叫びを聞いて部屋から飛び出して来た。

「そんなに喧嘩するのなら別れろよ！ ママ。僕の友達ディナリスの両親、たくさん離婚ディナリスしているもの」